

北方四島交流事業理解促進セミナー (北海学園大学) 開催結果報告書

(目次)

I 開催概要	1
II 講話要旨	3
1 テーマ:「北方四島交流事業の現状」 講師:野上 智宏(北方四島交流北海道推進委員会)	
2 テーマ:「祖父のふるさとへの思いと四島交流」 講師:佐藤 光(元島民3世(志発島))	
3 テーマ:「通訳者から見た四島交流」 講師:鶴田 和子(ロシア語通訳者)	
III アンケート結果	8
IV 資 料	12
1 広報資料(チラシ:開催要領を含む)	

令和7年2月

(公社)北方領土復帰期成同盟
(北方四島交流北海道推進委員会)

I 開催概要

1 目的

北方四島交流事業の理解促進を図る一環として、従前から交流へ参加・協力を頂いてきた北海学園大学において、大学生や関係者、一般の方々に北方四島交流に対する関心を持ち続け理解を深めて頂くため、セミナーと写真展示を行った。

- 2 主催等** 主催：(公社)北方領土復帰期成同盟（北方四島交流北海道推進委員会）
協力：北海学園大学

- 3 日時** 令和6年11月22日（金） 16：00～17：30

- 4 場所** 北海学園大学 豊平キャンパス教育会館棟 AV4教室

- 5 テーマ** 「様々な視点から語る北方四島交流」

6 講話【テーマ及び講師】

元島民3世、ロシア語通訳者等から、四島への渡航やロシア人住民との交流に参加した実体験を踏まえて、各々の立場と視点から講話をいただいた。

- ・「北方四島交流事業の現状」 北方四島交流北海道推進委員会 野上 智宏
 - ・「祖父のふるさとへの思いと四島交流」 元島民3世 佐藤 光 氏
 - ・「通訳者から見た四島交流」 ロシア語通訳者 鶴田 和子 氏
- その他：北方領土問題啓発動画の上映（セミナー開演前）

7 参加対象及び参加者数

北海学園大学の学生、四島交流事業の関係者、一般の方を対象に、19名参加
※関係者＝千島連盟等

8 写真展示

- (1) 日時 令和6年11月19日（火）～11月22日（金）
- (2) 場所 北海学園大学 豊平キャンパス 事務局庶務課前
- (3) 展示写真等
 - ・事業記録写真 27枚、 事業紹介パネル、
 - 北方四島の地図、四島の景勝地や施設の写真 15枚
- (4) 観覧者 学内学生限定で実施

9 総括・所感

参加者からは「学内でのパネル展も含め、こうした機会が学内で行われ、良い機会となった」、「北方領土の島名や場所は知っていたが、歴史や現在の交流などはあまり知らなかったなので、今回知ることができて良かった」等の声が寄せられた。

主催者としては、当初の目的どおり、大学生を中心とした若年層の参加者の方々に北方領土問題や四島交流事業の目的や果たしてきた役割について理解を深めていただけたものと考えている。

(セミナー及び写真展示の様子)

会場の様子



野上専門員 (道推進委員会)



佐藤光氏 (元島民3世)



鶴田和子氏 (ロシア語通訳者)



セミナー会場での写真展示



セミナー会場での写真展示



写真展示会場の様子



写真展示会場の様子



II 講話要旨（講話の順による）

1 テーマ：「北方四島交流事業の現状」

講 師：野上 智宏（北方四島交流北海道推進委員会）

【講話要旨】（講話資料を踏まえ事務局で整理）

（四島交流事業の概要）

- ・北方四島交流事業は、領土問題解決のための環境整備の一環であり、外交交渉を後押しするために行っている事業である。
- ・ゴルバチョフ大統領からの提案（1991年）があり、日ロ政府間で作った枠組みに基づき、日本人と島に暮らすロシア人のお互いの理解を進め、領土問題の解決につなげるため、1992年にスタートした。
- ・北方四島への訪問には、四島交流の他、自由訪問、北方墓参の枠組みがある。また、事業実施のために、前年の反省や課題、次年度計画について実務者レベルで意見交換、調整（代表者間協議）を行う。
- ・2019年訪問（択捉：教育関係者・青少年）の例により、訪問の流れ（乗船・出港から四島上陸、視察・住民交流会等の島内日程、根室到着まで）を説明。2019年受入（ファミリー：根室管内）の例により、受入の流れ（根室港での四島住民出迎えから管内各町への移動と交流プログラム、見送りまで）を説明。

（北海学園大学との関わり）

- ・2015年以降に実施した訪問事業に、北海学園大学の先生や学生合わせて4名が参加している。
- ・青少年受入事業で大学生中心のプログラムにおいて、北海学園大学の学生に参加・協力をいただいた。

（四島交流を取り巻く状況）

- ・四島交流について、推進委員会が実施した事業でこれまで訪問事業が139回、受入事業が138回行われ、合わせて13,669人の日本人・ロシア人住民が相互訪問した。
- ・訪問と交流の積み重ねにより、誤解や不安が払拭され、信頼関係に基づく深い交流が出来、相互理解の増進が着実に図られた。
- ・2020年以降、事業が実施できず、日露関係は厳しい状況にあるが、政府の基本方針に変わりはなく、事業再開は今後の日ロ関係の中でも最優先事項。

（事業に対する思いなど）

- ・訪問や受入事業を通してたくさんのロシア人と顔見知りになり、再会するごとに挨拶を交わす間柄になった。
- ・表面上の挨拶だけでなく、同行業務として、受入事業期間中は、体調不良で具合が悪くなったロシア人団員を医療機関に連れて行き受診させる等のサポートをして信頼関係を築いた。
- ・訪問事業においても、日本人団員が無事に健康状態で帰還出来ることを第一に考えて行動した。
- ・最近、四島在住ロシア人が日本人墓地の草刈りをしているとの報道もあったが、四島交流がなく相互理解が進んでいなかったら、彼らはそのような行動を起こしていなかったのではないかと思います。
- ・この関係維持のためにも、今日参加いただいた皆様には、これからも北方領土問題やビザなし交流に関心を持っていただき、今後もこのような機会にはご参加いただきたい。

II 講話要旨（講話の順による）

2 テーマ：「祖父のふるさとへの思いと四島交流」

講師：佐藤 光 氏（元島民3世（志発島））

【講話要旨】（講話資料を踏まえ事務局で整理）

（はじめに）

・根室半島からカムチャッカ半島の間の島の中でも、根室市から近い場所に位置している島が北方領土である。当時、北方領土には17,291人が暮らしていた。現在、そこに住んでいた元島民は5,000人を割っており、平均年齢は約89歳になっている。

（祖父のふるさと志発島について）

・私の祖父は、北方領土の中でも根室に最も近い歯舞群島の中の一番大きな島、志発島で3人兄弟の二男として生まれて、5歳まで暮らしていた。

・志発島は海から見ると真っ平で、山も何もないので、お煎餅みたいな形をしている。島の人達は「お煎餅島」と呼んでいた。西側と東側に集落が分かれていて、曾祖父達は東側で暮らしていた。島には良質な昆布が豊富にあったので、経済力がかなりあったと聞いている。

・島では高祖父の時代から漁業を営みながら商いをしていた。曾祖母は住んでいた別海町から小さな船に乗って、曾祖父に嫁いだ。

・戦争が始まると曾祖父が軍に入隊することになり、曾祖母は自分の実家に祖父たち幼子を抱えて疎開した。

・1945年8月9日、当時のソ連は日ソ中立条約を無視して、戦争を仕掛けてきた。8月15日に日本はポツダム宣言を受諾し降伏したが、ソ連軍は攻撃を続け北方四島にも攻撃を開始し、9月4日までに千島列島と北方四島を占領した。

・終戦後、曾祖父の帰りを待つために疎開先の実家から志発島に帰ろうとした矢先、北方四島がソ連軍に占拠されてしまい、島に戻れなくなった。

・志発島に残っていた高祖父と高祖母は、強制退去命令が出た後、志発島からサハリンの真岡に連行された。3カ月程してから北海道に戻れることになったが、引揚げ船の出発準備をしている間、高祖父は風邪をこじらせて船に乗ることなく息を引き取った。

・ソ連軍に占拠された79年前から今現在まで、択捉島、国後島、色丹島にはロシア人が暮らしていてロシア化が進んでいるが、歯舞群島にはロシアの警備隊が3人交替で滞在しているだけで、住民は誰一人いない。日本人が住んでいた住宅は、暖をとったり、工場を稼働させるための薪として壊されてしまった。今では何もかも無くなり、草が生い茂る島になってしまった。

（初めての北方領土訪問）

・私が祖父たちの島に行ったのは、2009年の墓参が初めてだった。この時に上陸したのは、志発島と色丹島である。志発島には、カフェノツというお寺があった場所に慰霊碑が建てられている。カフェノツの近くには、旧ソ連軍が建てた灯台がある。

・色丹島では、ロシア人が用意した車に乗ったが、墓地には車で行くことができなかったため、歩いてお墓まで行った。牛が野放しにされていたり、野良犬がたくさんいたのが衝撃的であった。

・2016年に自由訪問という形で再び志発島に行くことができた。上陸時には、ロシアの警備隊数名が来て監視をする。隊員を横目にカフェノツを目指して歩いて、着いたらお参りや自宅の場所を探す。限られた時間の中で、山や木などの目印になるものが全くないので、元島民の記憶だけが頼りになる。

・祖父の生家は、当時ではめずらしいコンクリートの土台を使っていた。初めて生家の跡を見つけることができたのは曾祖母が行った2001年の墓参で、おおよその家の跡地の場所を確認して、その後の2003年の墓参でコンクリートの土間を見つけることができた。

・毎回行くたびに变化する島の状況を目の当たりにしているが、ロシア人が住んでインフラが進む現状を見るのが良いのか、自然の影響で島が変わっていくのを見るのが良いのかを考えると、とても複雑な気持ちになる。北方四島を故郷に持つ元島民にとっては、どちらも耐え難い現状であることは変わりない。

・誰も何もできない歯舞群島は浸食だけが進み、近い将来島そのものが消失してしまうのではないかと不安を感じている。

（ビザなし交流への参加）

・国後島、択捉島、色丹島には、私もビザなし交流で訪問したことがある。また、受入事業にも参加し、ロシア人島民との交流を札幌で行ったこともある。

・訪問事業ではそれぞれの島で様々な交流プログラムを行ったが、択捉島を元島民の方と訪問した時に、船上から島が見えたら、その方が「俺の島が見えたぞ」と嬉しそうに話していた様子が印象に残っている。また、色丹島を訪問した時に、民族衣装を着た現地のロシア人が「私はいつでもどこでもあなたを歓迎します」という意味で、パンと塩を持って出迎えてくれた様子も印象に残っている。受入事業で親しくなったロシア人とも再開し、さらに交流を深めることもできたことも嬉しく感じている。

・日本語習得や青少年を対象とした受入事業では、札幌を訪問したロシア人と一緒に交流プログラムに参加して、北海道神宮や円山公園を散策したり、陶芸や餅つき、お茶会や寺院訪問などを一緒に体験するなど日本文化を学びながら交流を深めた。

（まとめ）

・このように、少しずつであるがロシア人住民と交流を深め、相互理解を図ってきた。しかし、2020年からコロナ禍とロシアによるウクライナ侵略で、全ての事業がストップし、今現在も実施できていない。

・少しでも多くの人に北方領土の現状について知っていただき、北方領土は大切な日本の固有の領土だということをお伝えすることが、自分の役目だと思っている。

II 講 話 要 旨（講話の順による）

3 テーマ：「通訳者から見た四島交流」

講師：鶴田 和子 氏（ロシア語通訳者）

【講話要旨】（講話資料を踏まえ事務局で整理）

（はじめに）

- ・1990年代に本学に入学して、第2外国語としてロシア語を選択した。その時はソ連崩壊の直後で、ロシア語がブームであり、ロシア船がたくさん来航していたことも選択の理由の一つである。
- ・本格的にロシア語に力を入れて勉強したのは本学を卒業してからであり、卒業した年に、モスクワから東方向にあるウラヂーミルという町に延長期間を含めて2年間留学した。
- ・私にとって初めての海外旅行でもあり、ある意味、センセーショナルであった。楽しい思いもしたが、苦しい思いもした。最初は短期留学の仲間と15～20名くらいのクラスに入れてもらったが、延長期間に入ると現地のロシア人の先生から「どうしてこの日本人は一人残ったのだろうか」と思われたようだ。外国人のためのロシア語を勉強する学部に入ったので、友達は全員外国人だった。中国からの留学生と同じクラスになり、皆で助け合って寮で生活していた。
- ・ロシア人は面倒見が良い。最初は冷たい感じがするが、それは表情が変わらない、にこやかにならないことが影響していると思う。しかし、一度懐に入ると、すごく面倒見も良いし、人懐っこい感じもする。そういう意味では交流しやすい人達だと私は考えている。

（ビザなし交流について）

- ・ウラヂーミルに2年間留学した後、モスクワで少し働き、帰国してから、ロシア語を活かした仕事に就いた。ビザなし交流の仕事は、その時期に紹介していただいた。
- ・もう20年もビザなし交流に関わっているが、自分は主体ではなく、あくまでも言葉の面でのサポーターということを自覚しつつも、その中でいろいろな人との交流があった。
- ・交流事業の中でも、四島の住民が北海道の人達の家庭を訪問する「ビジット」というプログラムがあるが、これは実際に日本人がどのような生活をしているのかをロシア人に見てもらうことができ、興味深い。「百聞は一見に如かず」ということわざはロシアにもあり、実際に見てもらうことには説得力がある。

（ビジット受入に手を挙げた羅臼町の酪農家）

- ・2013年にお会いした羅臼町で酪農家を営んでいる方を一つの例として皆さんに紹介したい。この方は自ら希望して、若くして関東の方から来て酪農を始められた方である。親の家業を継いだなどではなく、ご自分の代から酪農を始めた。
- ・ビジット家庭として受け入れるのは、元島民2世とか3世とか、何らかの島とのご縁を持っている場合が多いと思うが、この方は島とは縁がない人にも拘らず、羅臼町からのビジット家庭募集で、手を挙げられた。
- ・なぜ手を挙げたのか疑問に思っていたが、自宅の場所を見てピンときた。ご自宅は羅臼町中心部から車で20分くらいの場所にあり、ちょうど受入の日は天気の良い日で、丘の上あたりに位置していたことから、海岸沿いを走ると国後島が良く見えた。話を伺うと、夜になったら、島側の灯りが良く見えるくらいの近さである。もちろん反対に国後島に住むロシア人からも羅臼町の海岸を走る車のライトが良く見える。

・「向こうに見える島」に興味をわいてくると、次は「どんな人が住んでいるのだろう。目の色や髪の毛の色も違う、言葉も違う人が住んでいるのだろう。動植物はどんなのがあるのだろう」という思いが強くなってきたそう。

・いろいろな理由で受入を希望している家庭があると思うが、縁もゆかりもない、島と何も関係ない人であっても、毎日島を見続ければ、「いつか島に行ってみよう」という気持ちに最後は行きつくのだと思う。そして、その気持ちが交流へと繋がっていくことになる。

（まとめ）

・若い皆さんができることは何かと考えた時に、「島が見える 1 市 4 町に足を運んだらどうか」というのが私からの提案である。

・四島交流がストップしている中で、何ができるのかといえば、羅臼、根室などの道東に、車でもバイクでも良いから足を運んでもらう。ご自分の目で四島の姿を見てほしいと思う。そうするとこの方に「あそこに何があるのだろう」というふうに想像が膨らんでくる。

・そういう経験をすることで理解が深まり、そこから交流というのがまた始まるのではないかと思う。

Ⅲ アンケート結果

1 アンケート概要

(1) 目的

今後の取組の参考とするため、参加者の年齢や職業、参加のきっかけ、講話内容などについてアンケート調査を実施した。

(2) 調査方法

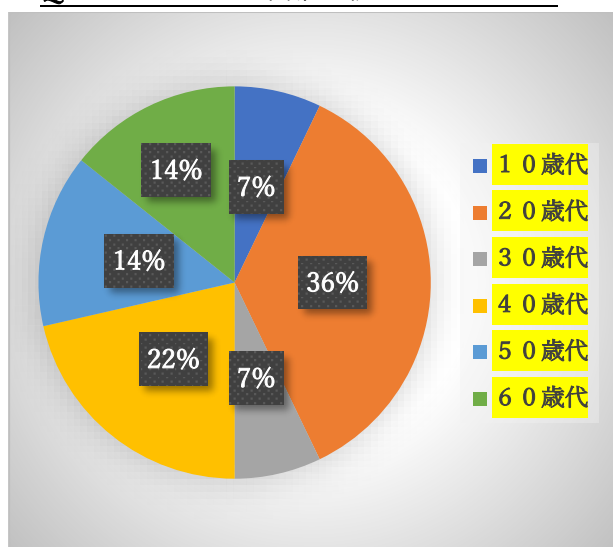
会場で調査票を配布・回収した。(設問は選択方式(一部複数回答可)及び記述式)

(3) 回答率

参加者19名中、14名が回答 (回収率:73.7%)

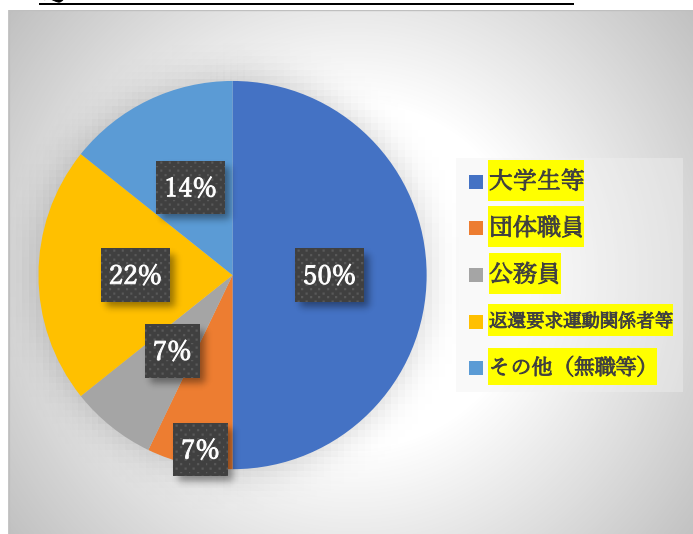
2 調査結果

Q1.→あなたの年齢を教えてください



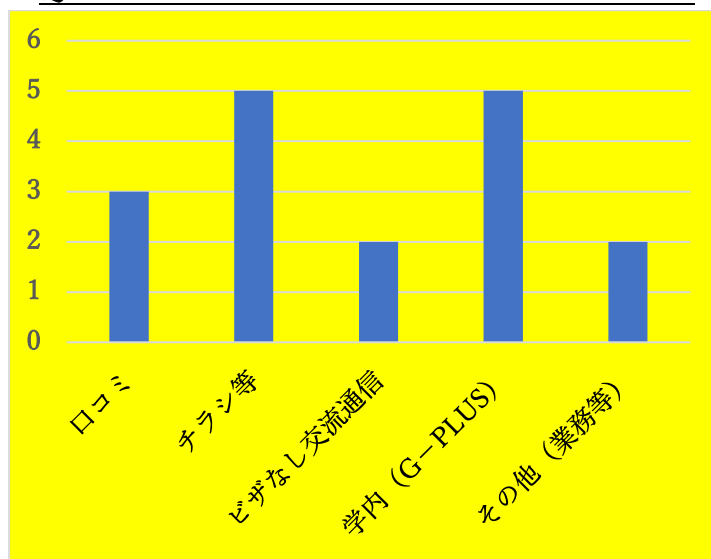
10歳代～30歳代を合わせて回答者全体の半数を占めた。

Q2.→あなたの職業等を教えてください



大学生等が5割と最も多く、次いで返還要求運動関係者等が多かった。

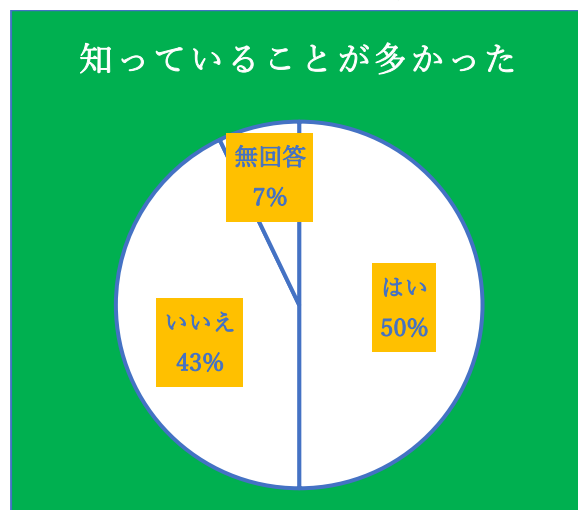
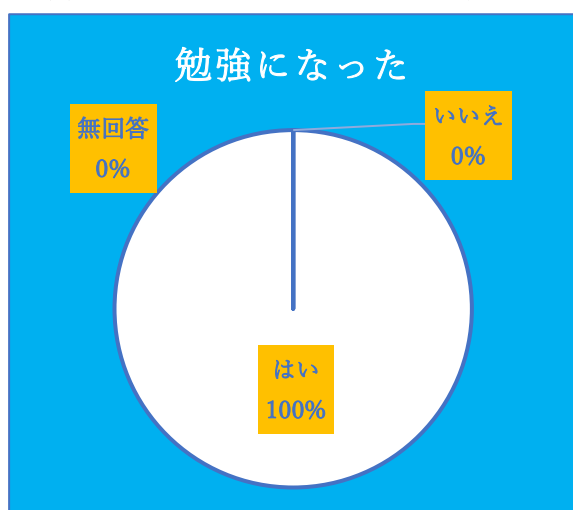
Q3.→このセミナーを知ったきっかけは何ですか



「チラシ等」・「学内（G－PLUS）」が多かったが、「口コミ」や「ビザなし交流通信」等の回答もあった。

Q4.→講話の内容についてお聞かせください

(1)「北方四島交流事業の現状」（講師：北方四島交流北海道推進委員会職員）について



回答者の10割が「勉強になった」と回答、「知っていることが多かったか」という設問には半数が「はい」と回答した。

その他、感想：

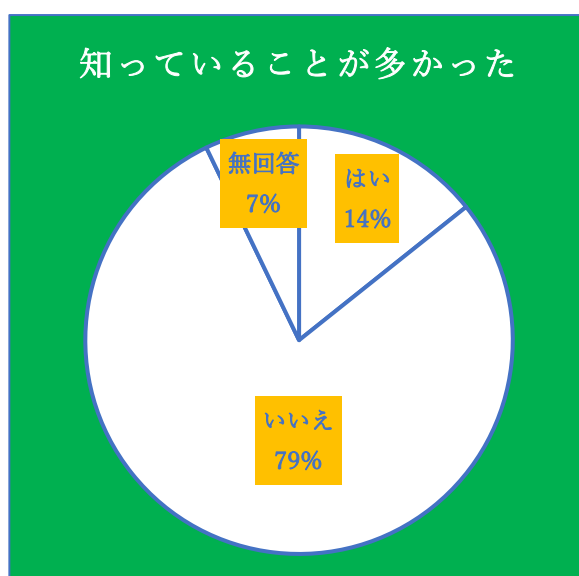
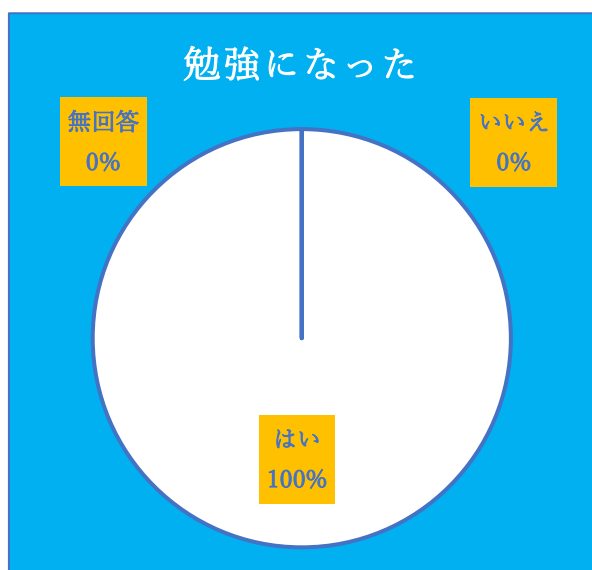
（講話内容について）

・活動（事業）の経緯やスケジュール（どんなことをやるのか）が分かりやすく説明されて概要をつかむことができた。（40歳代・大学生等（社会人学生））

（印象に残ったことや感想等）

・20年以上北海道に暮らしているのに、知らないことが多く、もっと学ばなければと思った。（20歳代・大学生等）

(2)「祖父のふるさとへの思いと四島交流」(講師：元島民3世)について



回答者の10割が「勉強になった」と回答、「知っていることが多かったか」という設問には8割近くが「いいえ」と回答した。

その他、感想：

(講話内容について)

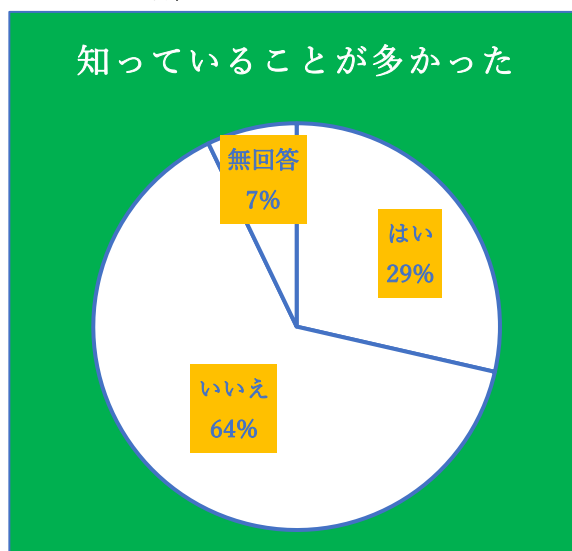
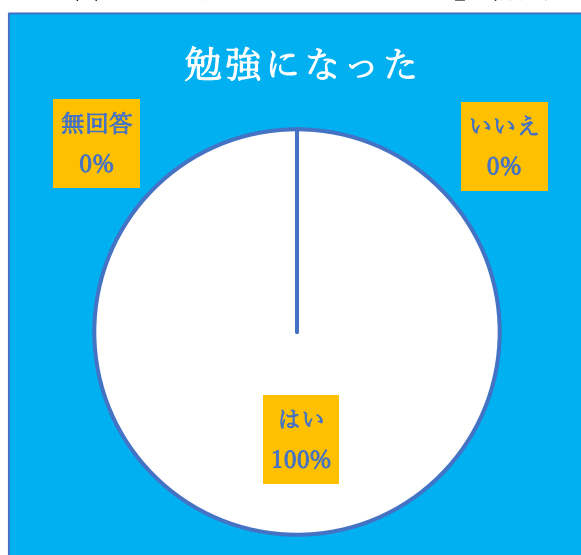
・初めて志発島のことを詳しく知ることができた。島からの引揚の際の話が具体的で分かりやすかった (60歳代・無職)

(印象に残ったことや感想等)

・元島民のお気持ちや元島民3世のお気持ちを知ることができ、聞いていて涙が出てきた。(40歳代・大学生等 (社会人学生))

・現在の実際の北方四島の暮らしぶりを見ることができ、面白かった。また、ひいおじいさんのお話を聞いて、すごく寂しい気持ちになった。(20歳代・大学生等)

(3)「通訳者から見た四島交流」(講師：ロシア語通訳者)について



回答者の10割が「勉強になった」と回答、「知っていることが多かったか」という設問には6割以上が「いいえ」と回答した。

その他、感想：

(講話内容について)

- ・通訳者から見たロシア人や交流事業の様子が聞けて、参考となった。(60歳代・無職)

(印象に残ったことや感想等)

- ・実際に四島を見て知ることが大切なのは、私も9月に岬に行ったばかりなので、強く思った。(10歳代・大学生等)
- ・ロシア人のイメージが変わり、今後、交流できる機会に参加したいと思った。(20歳代・大学生等(社会人学生))

Q5.→今回のセミナーについて、ご感想があれば、自由にお書きください

(セミナーの内容について)

- ・学内でのパネル展も含め、こうした機会が学内で行われ、良い機会となりました。(20歳代・大学生等)
- ・大変興味深い話でした。(20歳代・大学生等)
- ・皆様お疲れ様でした。有意義な事業でした。(50歳代・団体職員)

(セミナーに参加して)

- ・ずっと北海道に住んでいることもあり、北方領土の島名や場所は知っていましたが、歴史や現在の交流などはあまり知らなかったもので、今回知ることができ良かったです。(20歳代・大学生等)
- ・このようなセミナーに参加したのは初めてだったので、改めて問題を再認識しました。(20歳代・大学生等)

(今後のセミナーに関する要望)

- ・色々な方のお話をお聞きしたいです。(40歳代・返還要求運動関係者等)
- ・このセミナーのお知らせについては、ホームページのトップページに掲載した方が、より多くの方に知っていただけるのではないかと思います。(60歳代・無職)



事前予約不要
当日参加OK

理解促進

北方四島 交流

セミナー

～様々な視点から語る北方四島交流～



ボールペン
ブックカバー

※先着80名様まで

ご来場プレゼント

日時

2024

11/22

火

16:00 ▶ 17:30

場所

北海学園大学

豊平キャンパス教育会館棟 AV4教室

対象

どなたでもご参加いただけます

プログラム

16:00～

北方四島交流事業の現状

北方四島交流北海道推進委員会 野上 智宏

16:15～

祖父のふるさとへの思いと四島交流

元島民 3世 佐藤 光氏

16:50～

通訳者から見た四島交流

ロシア語通訳者 鶴田 和子氏

ゲスト講師



元島民 3世
佐藤 光氏

ロシア語通訳者
鶴田 和子氏

主催

(お問合せ)

(公社) 北方領土復帰期成同盟 (北方四島交流北海道推進委員会)

〒060-0001 札幌市中央区北1条西3丁目3番地 敷島プラザビル3階 TEL: (011) 221-3340

協力

北海学園大学

令和6年度北方四島交流理解促進セミナー (北海学園大学)

1. 目的

令和2年度以降、北方四島交流事業が実施できない状況の中、北方同盟では、現在の情勢が改善された際に事業をいち早く再開できるよう、関係機関と連携し準備を進めるとともに、北方四島交流事業への理解促進のための取組を行うこととしています。

このたび、四島交流事業の理解促進を図る一環として、従前から交流事業へ参加・協力を頂いてきた北海学園大学においてセミナーを行い、大学生等の皆さんに北方四島交流事業に対する関心及び理解を持ち続け深めて頂くこととしました。

2. テーマ

「様々な視点から語る北方四島交流」

3. 主催等

主催：(公社)北方領土復帰期成同盟(北方四島交流北海道推進委員会)

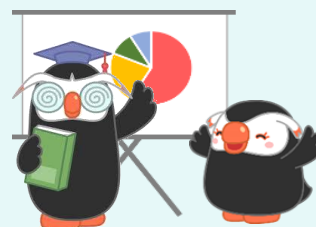
協力：北海学園大学

4. 日時・場所

催事名	日 時	場 所
セミナー	令和6年11月22日(金) 16:00～17:30	北海学園大学 豊平キャンパス教育会館棟AV4教室

5. 対象

どなたでもご参加いただけます(定員80名様まで)



6. 内容

交流事業の現状についてご説明するとともに、四島訪問やロシア人住民との交流に参加した方から、実体験を踏まえて、各々の立場・視点に立った講話等を頂き、参加者との質疑応答・意見交換を行います。

時間	講話テーマ	講 師
16:00～	北方四島交流事業の現状	道推進委員会 野上 智宏
16:15～	祖父のふるさとへの思いと四島交流	元島民3世 佐藤 光 氏
16:50～	通訳者から見た四島交流	ロシア語通訳者 鶴田 和子 氏

※セミナーの様子の写真等については、主催者のホームページへの掲載や関係機関への提供等を行うことがありますので、ご了承願います
※セミナー内容は当日変更する場合がありますので、ご了承願います